

ひょうご経済

■経済部

TEL: 078-3621-7094
FAX: 078-3601-5511
e-mail: keizai@coke-hp.co.jp

「個性ある経営者と交流が力に」

神戸市の弁理士法人有古特許事務所が19日で創立100周年を迎える。相談役の角田嘉宏さん(89)の父、好太郎さんが前身の角田内外国特許事務所を開いたのは1926年。62年にこの道に入った嘉宏さんが海外での特許出願に力を注ぐ一方、日清食品や伊藤ハム、川崎重工業など、新商品や新技術を打ち出した企業を知的所有権の面から支えた。財界では神戸経済同友会代表幹事などを歴任。「国際都市・神戸で個性ある経営者と交流できたことが今につながった」と話す。(特別編集委員・加藤正文)

創業者の息子、相談役

角田嘉宏さん(89)に聞く



有古特許事務所の100年の歩みを振り返る角田嘉宏さん＝神戸市中央区小野柄通7

米での「カップヌードル」訴訟も担当

弁理士資格取得は24歳。日本経済の成長著しい時代、「今後、外国での特許出願が増えてくる」と判断し、単身、欧州に飛び、アボナして特許事務所を回った。ロンドンで特許事務所の所長と意気投合し、提携に成功した。「高度成長期で日本の特許出願が増える一方、海外からの出願依頼も入ってくるようになった」。

エポックは日清食品の創業者、安藤百福さんとの出会いだ。「カップヌードル」が誕生した71年、同社に呼ばれ、試作品を食べた。「断熱性のカップ型容器。これは食器、調理器、運ぶときのコンテナの三つの役目を果たしている。新商品としていける」。麺の揚げ方、



綿貫宏介さんがデザインした有古特許事務所のロゴマーク(角田嘉宏さん提供)

入れ方に発明の在りかを見抜き、権利の保護範囲を確定させた。米国では日本の特許を巡る訴訟も担当した。著書「パテントビジネス」(85年)「パテントビジネスの現場」(2003年)に詳しく書かれている。

交流があったのが芸術家の故・綿貫宏介さんだ。菓子の「本高砂屋」や酒の「小鼓」、有馬温泉の「陶泉御所坊」などのブランドデザインは有名だ。角田さんが所名の変更を相談したところ、ARCO(アルコ)が提案された。「ラテン語で架け橋を意味するとともに漢字では古(いにしえ)より有り、になる」。阪神・淡路大震災の95年に「有古」に変え、ロゴマークもデザインしてもらった。

角田さんが大切にしていたのは地元経営者との交流だ。「生来の人好きな性格で類は友を呼んだ」。神戸JCやロータリークラブに参加。ワインの会、食の会「食総合研究所」(愛称、うまいもん探偵団)を創設し、それぞれ代表を務め、「うまいもん探偵の味」神戸たべある記」の本も出した。

高砂に「毎日安売」

スーパー「マルアイ」
来月、大量陳列の新業態



マルアイイビツグミの「大量陳列場を作り、価格や味で、従業員が、今回積が約2イの中でや物流のさを生かす」とで補充段を下げて、店舗口なり、買イラストット表記エプロンBGMもえる。山営業本部100年

「毎日安売りを意味する「エプリーロープライス」(E DLP)の営業スタイルを導入し、陳列に工夫を凝らし、BGMを洋楽にするなど、既存店とは異なる見せ方に取り組む。

マルアイビツグは「ダイナミック(躍動)」「デスティネーション(来店目的)」「デライト(楽しい)」

食品スーパー「マルアイ」(加古川市)は9月9日、新業態店「MARUAI BIG」を高砂市のショッピングモール「アクロスプラザ高砂」にオープンする。毎日安売りを意味する「エプリーロープライス」(E DLP)の営業スタイルを導入し、陳列に工夫を凝らし、BGMを洋楽にするなど、既存店とは異なる見せ方に取り組む。

マルアイビツグは「ダイナミック(躍動)」「デスティネーション(来店目的)」「デライト(楽しい)」

「フンとして受け入れられる可能性は高い」と見込む。販売量が増えればタイから直送する体制を整え、現地専用の包装を作るつもりだ。

夜市をはじめ、外食文化が盛んなため、飲食店への販売にも意欲を見せる。一度食べてもらえば、家庭での調理につながることを考えるからだ。10月には、台南に近い高雄でも見本市に出展し、浸透を狙う。

2025年度、神戸空港で出入国した外国人旅客のうち、台湾が4割を超えて最も多かった。高村社長は「神戸土産になればうれしい」とし、自らが経営するレストランとの相乗効果も期待する。

台湾市場では、25年大阪・関西万博会場で販売した「グルテンフリー醤油ラーメン」との2本柱で勝負する。30年に、ビーフンを中心に年間100万食の販売を目指す。神戸で育まれた定番の味が、アジアの食卓に新たな風を吹き込む。

「国」がの他公共5倍と大「独立行」減だった容は明らか地域別「北播磨」で請負



台湾から日本に伝わり、神戸で独自の進化を遂げたビーフンが、歳月を経て逆進出を果たした。

今年7月、ビーフン製造最大手のケンミン食品(神戸市中央区)は、1960年から販売するロングセラー商品「ケンミン焼ビーフン」を台湾で発売した。創業・高村健氏氏(1922~2009年)の故郷。孫の高村祐輝社長(43)は「単なる里帰りではなく、錦を飾るような思い」と感慨深げに語る。

本場・創業者の故郷へ逆進出

②ビーフン

ビーフンは米から作られた麺で、中国南部で生まれ、台湾をはじめアジア各地にビーフンを開発。今では年広まった。日本の家庭で年間約2千万食を売り上げる

じみの薄い食品だったため、健氏は鶏だしとしょうゆで味付けし、フライパンで具材と炒めて簡単に調理できる世界初の即席焼きビーフンを開発。今では年



ケンミン食品が台湾最大級の食品見本市に出したブース＝6月、台北市(同社提供)



ケンミン食品が台湾で販売を開始した看板商品「ケンミン焼ビーフン」を持つ高村祐輝社長＝神戸市中央区海岸通5

看板商品に育った。日本で成功したビーフンを本場へ。同社が米国に続く海外市場として台湾を定めたのは台湾だった。

6月下旬、台北市であった台湾最大級の食品見本市に出展。高村社長も神戸空から訪れ、ブースに立つた。業者や消費者向けの試食用に約3千食を提供し、味の評判は上々だったという。

うれしい出来事もあった。南部・台南市出身の来場者が試食し、「昔食べた

は「日本から来た新しいビ

による味の付いていない乾

麺の中で目立ち、高村社長